

Chiroptera



キロプテラ Vol.1 No.1 1993.1

- ◆会発足によせて
- ◆各地からの報告
- ◆西表島のコウモリについて
- ◆インフォメーション





こういう会がほしいなという願い持ち続けてきました。会が全国的な動きとなることを祈っています。これからは楽しみ。

種毎の生息マップをつくりたい。

森林棲コウモリの分布、採集方法などの紹介、バンディングのデータ管理、情報提供、リングの供給など。

バンドのナンバー等を鳥の様に共通にできないか。

観察会など、やりたいです。

きちんとした組織になることを希望します。

コウモリ研究者には、ファウナ、生態を調べる者と、生理などを知るため標本として捕獲する者の2種がありますので、詳細な生息地などの公表（特に出産・育児洞）については慎重な判断が必要です。

初心者も楽しめるものにして下さい。

一部のプロ研究者に採集場所を教えて、ディスターブされないような情報公開が大切。本当に怖い研究者もいるものです。しかしそれでは保護が広まらないし、むずかしい問題です。

コウモリに興味のある人達の連絡・交流の場を提供してほしい。

何もわからないまま、気がついた時はもうほとんど手遅れ…というのは、もういいかげん終わりにするための第一歩として。

長く続けてほしい。

日本のコウモリの分布を知りたいです。

とにかく楽しい会でありますように。

これからの会の活動が楽しみです。コウモリのために、何かできればと思っています。

日本産コウモリに関する文献リストの作成など。

保護を叫ぶあまり研究調査について敵対視したり妨害したりしないように…。また、写真撮影には十分注意を促してほしい。

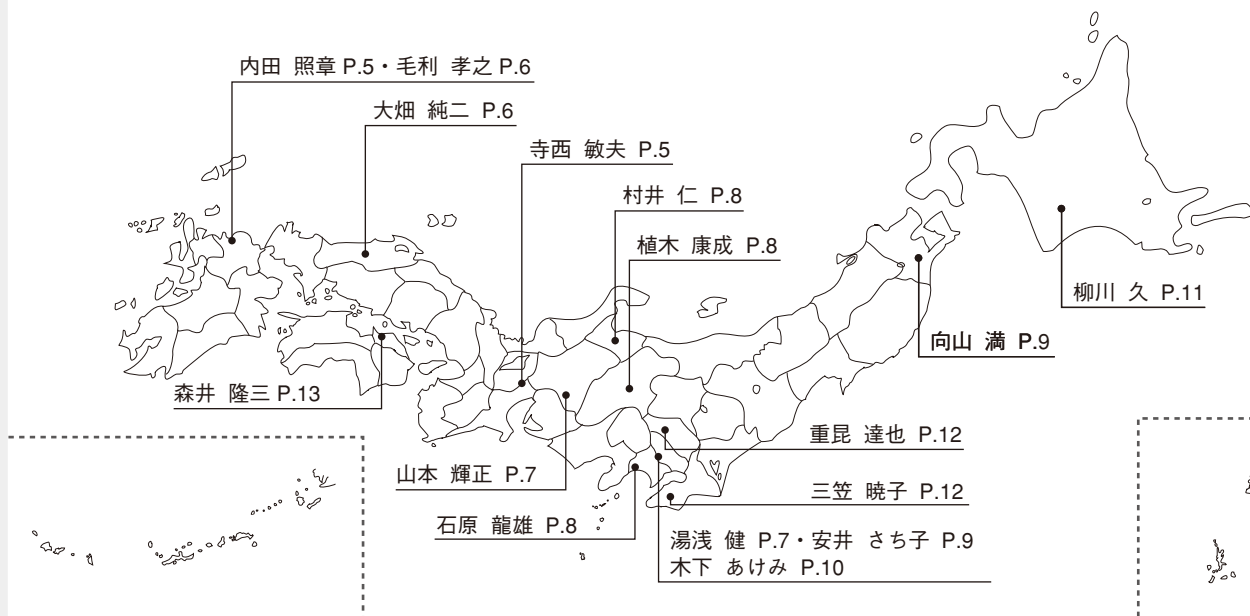
機関誌名は日本語の「翼手目」を活かせないか。

コウモリの情報のデータベース化が必要でしょう。

アンケート結果

1. コウモリを見たり観察したこと ある54 ない 0
2. その種類
アブラ38、モモジロ17、コキクガシラ16、ククガシラ15、ユビナガ11、ヤマ10、ウサギ10、テング7、コテング5、キタクビワ3、ヤエヤマオオ3、オヒキ2、クビワ2、ノレン2、ホオヒゲsp.2、オリイオオ1、ドーベントン1、モリアブラ1、ヤエヤマユビナガ1、オキナワコキク1、洞窟棲全般4、多数4
3. コウモリを飼育したこと ある22 ない31
4. その種類

- アブラ12、モモジロ4、ユビナガ3、ウサギ2、コキク2、ヤマ1、ダイトウオオ1、オリイオオ1、ヒナ1、クビワ1、キタクビワ1、コテング1、モリアブラ1、ククガシラ1、ノレン1、洞窟棲全般1、多数2
5. バットディテクターを使ったこと ある31 ない22
6. コウモリにバンドしたこと ある17 ない35
7. その種類
クク3、コキク3、アブラ2、モモジロ2、オリイオオ1、クビワ1、キタクビワ1、ヒナ1、オヒキ1、いろいろ6
8. コウモリ巣箱を作ったこと ある13 ない41



4

筆者は、1979年4月以降、三重県および滋賀県県境に位置する北部鈴鹿山系の洞穴棲コウモリにバンディングを行っている。これまでに、コキクガシラコウモリ・キクガシラコウモリ・モモジロコウモリ・テングコウモリおよび、ユビナガコウモリの5種を記録し、バンディングを行い、モモジロコウモリを除く4種のコウモリを再捕獲して移動等を記録した。コキクガシラコウモリ・キクガシラコウモリ・ユビナガコウモリの3種は、10年を越える生存を確認し、コキクガシラコウモリ・キクガシラコウモリはそれぞれおよそ20km、ユビナガコウモリはおよそ70kmの移動を確認している。但し、大規模な冬眠洞、出産・育児洞はまだ見つけられずにいるが、他地域に比べて北鈴鹿のコウモリ群のコウモリの個体数は少ないように感じている。

(名古屋市 寺西敏夫)

5

コウモリの会の発足を心からお慶び申し上げます。この会が今後発展されることを念じております。先日、毛利孝之先生からバット・ディテクターをお借りし、わが家の庭に飛来して採餌するイエコウモリの声を初めて聞くことができ、感激しました。約4～5万サイクルのあたりで最も強く聞こえました。このディテクターの開発に協力されたであろう、アバーディーン大学のRacey教授に遠く思いを馳せながら、愉快な一時を一人で楽しみました。

(福岡市 内田照章)

*内田先生からは、『九大退官記念論文集 翼手類の部』と著者『こウモリの不思議』を会にいただきました。ありがとうございました。

細々とですが、1983年より、島根県の主に中央部においてコウモリの分布や移動について調査してきました。これまでに島根県内で棲息を確認したコウモリは、キクガシラ・コキクガシラ・モモジロ・ユビナガ・ノレン・アブラ・テング・コテング、それに私自身が採集した標本ではありませんがナミエヒナコウモリの9種です。いわゆる樹洞棲コウモリではテングとコテングの確認があるだけで、他にヤマコウモリなど何種類かの棲息が考えられます。ユビナガコウモリは、バンディング調査によって、冬眠期—非冬眠非繁殖期—繁殖期という季節移動のパターンが（ぼんやりとですが）見えてきました。私が勤務している三瓶（さんべ）自然館にはコウモリハウスというコンクリート製の建造物があり、コウモリの導入を計画中ですが、まだ成功していません。また、バット・ボックスも設置していますが、これも使用されてはいません。どうやってコウモリを導入するかは、今後の課題の一つです。

（島根県立三瓶自然館主任指導員 大畑純二）

現在、私は福岡市内で主にイエコウモリの調査・採集を行っています。実際には、コウモリの生態を観察するのではなく、この動物の精子とか卵が長生きすることの仕組みを知りたいと云うのが本当の仕事になります。その様な訳で「コウモリの会」の多くの方々とはその目的を異にすると思われそうですが、私もコウモリ類に興味を持ち、それらの保護を願うもの一人として仲間入りさせていただきました。

（九州大学農学部動物学教室 毛利孝之）

アブラコウモリについての卒業論文を書いています。今年の春から秋まで多摩川の中流域（川崎市と東京都稲城市の境）で、採餌個体数のカウント、ルーストの探索などを行いました。採餌個体数のカウントは47カ所で行い、41のルーストを発見しました。（東京農工大野生動物管理学部 湯浅健）

現在までに、コキクガシラコウモリとヤマコウモリの生態を調査してきました。そして現在は、クビワコウモリの生態調査と保護活動を行っています。今年で3年目ですが、生態調査の方はなかなか難しい状況ですが、保護活動の方は地元の行政担当者の方の理解が得られ、小屋を今年から作ってもらいました。クビワコウモリがそちらに移り出産保育群を形成してくれるように努力しているところです。ただ、なかなか思うようにはいかず、来年以降も挑戦する予定になっています。

（岐阜県立多治見高等学校 山本輝正）

クビワコウモリ



私の仕事は動物園の飼育係です。担当は日本産夜行性動物（テン・ノウサギ・ムササビなど）です。動物園で食虫性コウモリを展示したいと思い、アブラコウモリを飼育していましたが、先日最後の1個体が死んでしまいました。（ガッカリ！）余暇時には、当会員で同じ職場の穴田氏とともに富山県内の山を歩き廻っています。富山県内の山にはいくつかの発電所があり、発電所に続く道には隧道があります。隧道、そこには何種類かのコウモリが生活しています。キクガシラ・ウサギ・モモジロ…etc. 今のところは生息種の確認しかしておりませんが、今後はテーマをもって調査をしていきたいと思っています。

（富山市ファミリーパーク村井仁志）

職業は製造業のエンジニアです。地元の野鳥の会で観察会の担当をしています。今年、ムササビに加えて、コウモリ観察会をレパトリーにしました。まだアブラコウモリとヤマコウモリしか見たことがないのですが、来年は洞窟棲のやつも見たいと思っています。（長野県諏訪市 植木康徳）

箱根地方からは、42種類の哺乳類が田代道彌氏によって報告されており、このうち12種類がコウモリで占められている。一方、ここ数年間で記録された哺乳類は34種類であるが、コウモリ類は7種類のみで、しかも安定した個体数が維持されているのはモモジロコウモリ・ユビナガコウモリ・アブラ

コウモリ位のものである。現在の箱根では、人為的要因によるイノシシ・タヌキ・ハクビシンの増加が著しく、その他の種類も目撃の機会が多いため、自然環境の改変による危機感はあまり無い。しかし、コウモリ類に関しては、かつての生息場所から次々と姿を消しているようだ。手遅れという気がしないでもないが、生息状況の把握と、共存のための研究の進展が切望される。コウモリの会が発足することにより、人がいなくて調査も進まない田舎のコウモリの保護につながることを期待している。

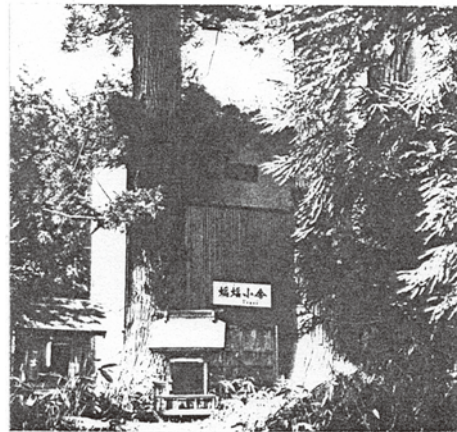
(箱根町立大涌谷自然科学館 石原龍雄)

私は多摩川中流域の東京都府中市でアブラコウモリの生態調査を行っています。なぜ、都市域にアブラコウモリは生息できるのか、また都市域のアブラコウモリの分布・個体群動態に興味をもって研究を進めています。一方、まだ始めたばかりで、しかも片手間ですが、伊豆諸島のコウモリの生息状況（まずは各島の種類相から）についても少しずつ調べていけたらと思っています。

(東京農工大学大学院生 安井さち子)

私の活動は次の2つになります。一つは青森県天間林村天間館神社のヒナコウモリの保護と調査です。ここには蝙蝠小舎があって、毎年妊娠した雌が3000頭近く集まって、出産保育

コロニーを作ります。標識を続けていて、ここだけで5600頭ほど、他のコロニーを含めると8000頭を越えます。標識個体の回収では、9年の最長寿命とか、県外からは宮城県での回収例があります。また、数は少ないがヒナコウモリ以外にも標識をしているので、標識個体の記録があれば教えていただければ幸いです。もう一つは、森林棲コウモリの調査です。日本産哺乳類の中で、多数の種を含む森林棲コウモリが棲む広葉樹林が急速に減っています。東北地方北部だけでも、仲間と効率の低い調査を続けています。なお、青森県のコウモリ類は全部で17種になります。



蝙蝠小舎

(青森県立三戸高校 向山 満)

川崎市に生息するコウモリは、ほとんどがアブラコウモリです。(他にはニホンヤマコウモリが市内で一か所1985年に見つかっただけです。)川崎市青少年科学館では、市域自然調査の一環としてアブラコウモリの市内の分布状況(1984-1988、はがきによる)を調べたり、「アブラコウモリ生態資料1~3」として、市内の一地域における詳細な観察記録を報告しています(1988,1990,1991)。これは、市内在住の谷口勝直氏の観察をまとめたもので、1平方Kmの中に160カ所あるねぐらの分布や、出入口の類型や方角、冬眠明けや冬眠入りの時期のデータなどです。また、早朝帰巢するアブラコウモリを観察する一般公募の「自然観察会」は、電車の動いていない時間帯に企画するなんて！と一部上司

の不評を買いつつ、参加者の方には好評です。人家にすみ、身近にいるはずのアブラコウモリですが、案外知られていないのには驚きます。夕方、ちょっと上を見れば空を舞っているのがわかるのに、気にとめる人が少ないのは残念です。いざ、生態を知りたいと文献をさがしてもあまり無く、バンディングして個体識別をするのが調査の基本でしょうが、そんな事をして同じねぐらに戻ってくるのだろうか？などと漫然と考え、手をこまねいています。コウモリの調査は、他の調査に押され現在やる時間がないのが残念ですが、なんとか情報収集だけでもと思い、入会させていただきました。よろしくお願ひします。

(神奈川県 川崎市青少年科学館 木下あけみ)

*木下さんからは、『アブラコウモリ生態資料その(1)~(3)』—川崎市青少年科学館年報No.5、同館紀要No.1,2を会にいただきました。ありがとうございました。

私の勤務する帯広畜産大学の構内には、規模は小さいながら針葉樹林、広葉樹林、針広混交林がいくつかあります。これらの林には、私の現在の主研究テーマであるエゾモモンガ研究用の巣箱が架設してあります。この巣箱をたまにコウモリが使っています。例えば、比較的乾いた土地にある針葉樹人工林の巣箱には、毎年ヤマコウモリが数匹の小群で入っていますし、1例だけテングコウモリが単独で入っていました。また、川に接したヤチダモやハンノキの林では、ノレンコウモリ、カグヤコウモリが巣箱を繁殖用に使います。片手間ではありますが、こういったコウモリの巣箱利用を調べています。とにかく十勝（道東）にはこういった種類がいるのかも、まだ詳しく調べられていませんので、

少しずつ研究を進めてゆこうと思っています。（帯広畜産大学野生動物管理学的研究室 柳川 久）

私は、房総半島にあるキクガシラコウモリとユビナガコウモリの混棲コロニーの観察をしています。月に一度、各種の個体数を数えることで、季節による各種の数の変動や、いつ頃出産（キクガシラのみ）して、いつ頃冬眠に入るかなどだいたいわかったところです。バンドしようと思ひ許可をとったのですが、観察のテーマを定めきれず、まだ行っていません。また、大学時代に捕まえて飼育し、出産と育児の記録をとった北海道のキタノクビワコウモリのコロニーのある小学校の体育館が、今年の夏に取り壊されてしまいました。あわてて近所の廃屋に捕まえて避難させたのですが、1か月後に行ったら全くなくなっていました。巣箱もかけたのですが、今のところ入っていません。こちらは3年前からのバンディングで成獣♀だけで100~150頭ほどいることがわかっています。その後、バンド個体が1頭そこから約8Km離れた町で、道にはいつくばっていたのを保護されたのが、その後の唯一の情報です。

(神奈川県 逗子市 三笠暁子)

毎年夏になると、我が家の外壁に2~3個体のアブラコウモリがやってきてとまります。正確な記録をつけているわけではないのですが、7~8月の午後11時~午前2時頃に外壁を見てみると、外壁がL字に曲がっている部分と屋根がつくる、ちょうどコーナーの部分にコウモリが1個体づつとま

っています。現在コウモリがとまる場所は3か所で、その下には糞が溜まっています。明け方にはいなくなり、また屋根裏に入り込んでいく訳でもないのに、日没後の採餌の後に休憩しているのではないかと思うのですが？また、壁にとまる直前に可聴音で鳴くようで、夜半にキン・キンという鋭い声を聞くことがかなり頻繁にあります。同様の観察例をお持ちの方がいらっしゃいましたら、比較してみたいと思っています。
(東洋大1年 重昆達也)

会員の皆様はじめましてよろしくお願いたします。コウモリに関する会を作ろうという話は、1991年度の哺乳類学会（高松）の後で持ち上がってきました。学会に参加していました数人が夜の酒場でいろいろと案をだしあい、それではA先生にとりまとめを、ということになったのですが、先生も忙しくてそのままになっていました。今回コウモリの会ができるようになったのは、A先生の働きかけのようですが、いい会にしてほしいと思います。私は、20数年来コウモリを通して自然をみてきました。今は、アブラコウモリの生物学的研究という大きなテーマのもとで、細々と研究を続けています。1992年には、約100年間の四国でのコウモリの研究記録を整理しました。1993年には、香川県のアブラコウモリの分布を整理して出す予定です。（2月発刊、香川生物誌上）。日本の各地域でこのような整理ができれば、日本のコウモリの現状がよくわかるのではないのでしょうか。

(香川県坂出市 森井隆三)

西表島のコウモリについて



世界的に貴重な2種のコウモリが絶滅の危機に瀕している。この2種が毎年出産・育児を行っている2つの洞窟周辺の国有林が、今年の1月にも伐採されることになってしまった。すでに伐採は決定されてしまったが、このコウモリをとりまく絶望的な状況をお知らせするために、西表島のコウモリを約10年間に渡って調査し続けている山口大学の松村澄子氏が、昨年11月に環境庁に提出した2種の保護を求める要望書を、氏の同意の下、掲載する。

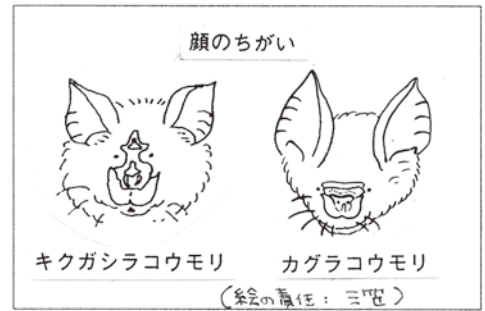
沖縄県西表島の^{大富第一洞窟}および^{大富第二洞窟}の北側から西へ約156haの規模で計画されている、県営農地基盤整備事業のための国有林の払い下げ区域に関し、貴重な固有種であり遺存種であるヤエヤマカグラコウモリとイリ

オモテキクガシラコウモリの、主要な繁殖洞である2つの洞窟に近い特別な低地林であることを考慮し、環境アセスメントを行い、種の保存が可能な対策をとって頂けるようお願い致します。

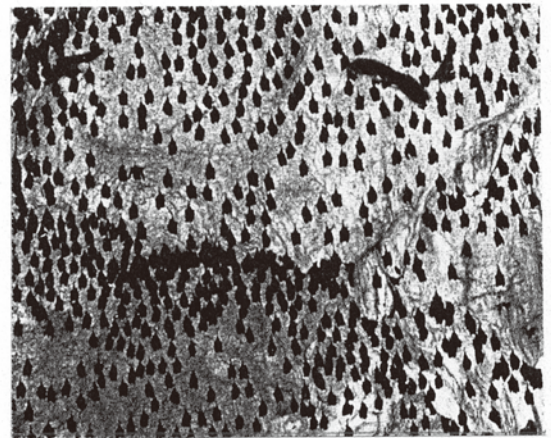
沖縄県西表島に生息するヤエヤマカグラコウモリは熱帯系の種で、カグラコウモリ属の北限種にあたる。もちろん我国で見られる唯一種のカグラコウモリであり、環境庁のレッド・データ・ブックにも稀少種として掲載されている。本種の近縁種は台湾にも分布せず、タイ南部に分布することから、八重山諸島が大陸と地続きだった頃にこの地に分布を広げ、島として隔離された後もこの地に生き残っている遺存種と考えられている。吉行（1990）は、本種はヒマラヤカグラコウモリ群の中で最

も原始的形質を保持しており、きわめて貴重な遺存種であると述べている。一方、和名にイリオモテの名を冠するイリオモテキクガシラコウモリは、HILL & YOSHIYUKI (1980) によって記載された新種であり、八重山諸島の固有種でありまた遺存種である。この種はインド洋のアンダマン諸島に分布するアンダマンキクガシラコウモリや台湾のヒナキクガシラコウモリと近縁種とみなされている。

八重山諸島における過去20年間の急速な開発、特に森林伐採のためにもう一つの主な生息地であった石垣島では極端に減少し、この島内ではではもはやこれら2種が種として存続できる個体数を割り、絶滅への途をたどっているのが現状である。南西諸島における急激な森林破壊によってコウモリ類が著しく減少しているという指摘は、沢田ら(1987)によっても行われている。西表島の個体群は、両種を種として存続させるための最後の砦といえる。西表島は国立公園区域を持つために石垣島に比べると開発の速度はゆるやかであったが、島内の海拔100m以下の低地林は大半が公園区から除かれているためにおよそ7-8割が伐採されてしまった。西表島大富地区には大富第一洞窟と第二洞窟があり、前者は約1万頭のヤエヤマカグラコウモリの、また後者は数千頭のイリオモテキクガシラコウモリの繁殖洞として有名である。両種の生態や行動については1983年来、山口大学の松村によって研究が行われ、天然記念物へ指定する働きかけも行



ってきた。しかし、ここ8年間に大富地区で第2回目の県営農地基盤整備事業が計画され、すでに大富地区海側にあたる仲間崎一帯の工事が終了し、次いで大富洞から100mほどの距離にある低地国有林150haが工事区域として伐採される計画となっている。西表島自然史研究会(代表 阪口法明)と松村らは、竹富町教育委員会の後援で1990年と1991年にカグラコウモリの生息実体調査を、1991年と1992年にはWWF Jの援助を受け、琉球大学名誉教授池原貞雄氏が加わり2種の保護のための調査を行った。これらの調査結果では、両種とも海拔100m以下の低地林(松林、広葉樹林、マングローブ林など)を主な採餌場とし、耕作地は餌場として利用しないこと、幼獣は洞窟近くの沢や林で採餌すること、洞口から西方へ伸びる沢はカグラコウモリの餌場への主要なルートであること、冬眠しないため冬眠脂肪の貯えを欠くこれらのコウモリが、冬期に近くの森に依存する度合は本土のコウモリ以上に高いことが明らかになった。繁殖洞に近い森をこれほど大規模



カグラコウモリのコロニー。均等に並ぶのが特徴あ。
(撮影:村田 行)

に失うことが、滅びやすい遺存種に与える影響は計り知れない。

1985年、沖縄県教育委員会によって行なわれた「西表島天然記念物緊急調査報告3、西表島の洞窟性翼手類」において、コウモリの生息環境としての大富第一洞窟および第二洞窟の保護、および餌供給源としての自然度の高い森を一定面積確保することの必要性が指摘されている。当時、第一洞のカグラコウモリの推定個体数は1万7千頭であったが、6年後の1991年3月と7月、西表島自然史研究会による同じ方法による個体数カウント調査の結果では1万頭前後と推定されている。イリオモテキクガシラコウモリについても、近年保育集団サイズや集団の形成される場所が不安定化し、1990年6月、数千頭の保育集団が母子とも消失するなどの異常行動が見られた。このような状況のもとで、払下げ区域に関する詳細な検討が行なわれないうまま、今年9月、沖縄県農林水産課、八重山農林土木事務所、竹富町建設課、希望農家など関係機関および関係者が林野庁沖縄営林署に対し、従来の計画区域のうち最も洞窟に近い区域の払下げを申請するにいたっている。

このように、コウモリに対する十分な保護策が立てられないまま性急な開発が行なわれれば、貴重な両種の絶滅に結びつく、とりかえしのつかない影響を与えるおそれがあります。改めて、本地域における環境アセスメントの実施をお願いするものであります。

(松村澄子 山口大学医療技術短期大学部 助教授)

Information

■Lambournes Ltd. [redacted] では、コウモリのバンドを千個単位で作ってくれる。サイズは5種類。値段は文字数やサイズで異なるが一番小さいサイズで約2万円/1000個。カタログを請求するとサンプルも送ってくれる。

■「Ecological and Behavioral Methods for Study of Bats」 Thomas H. Kunz Smithsonian Institution Press (1988) は、コウモリの捕獲法から食性調査、標識法、撮影法まで調査・研究の方法が満載の本。各章末に道具の購入先が示されている。

■西表島での野生動植物研究者に助成金を出すことと、将来ナショナルトラスト方式によって原生林を買い取り保全するための資金作りを目的とした「西表野生基金」がある。詳細は右記まで。 [redacted]

■バットディテクターのうちイギリスのサミット社製のは値段も手ごろ。直接個人でも購入できるがナチュラルリストクラブ [redacted] で注文も可。 Summit [redacted]

■来号の原稿募集について [redacted] 締切は3月1日です。
*特集はコウモリのねぐらについて考えたいと思います。巣箱や小屋は、どんな要因が利用するポイントなのか等ご意見お待ちしております。また、樹洞や洞窟はどんな条件のものを好んで使うのでしょうか。もちろん推測で構いません。海外の例などをご存じの方もぜひお願いします。巣箱の設計図などを比較してみるのも面白いと思います。
*コウモリ目撃情報 こんなコウモリを見た、死体を拾った、面白い行動を観察したなどの情報をお寄せ下さい。昔のことでかまいません。地名や日時の公表は各自に委ねます。
*バンドニュース バンドに関するデータ(日時・場所・種類・数・No.等)を交換しあいませんか。公表する内容は各自に委ねます。
*インフォメーション 推薦する書籍、調査道具等の紹介、その他コウモリに関する物の情報を幅広く掲載したいと思います。
*皆さんの対コウモリ活動状況は今後も募集します。今回パスされた方、ぜひお寄せ下さい。(400字以内)
*会・会報に関する意見や要望もお寄せ下さい。
■タイトルのロゴとイラストは、村上康成さんのご好意で会に作っていただきました。どうもありがとうございました。

Chiroptera Vol.1 No.1 1993.1.

●タイトルロゴ・イラスト 村上 康成 ●編集 三笠 暁子

発行:コウモリの会 [redacted]

【編集後記】 ついに第一号を出すことができました。原稿を期日通りにくださった方本当にごめんなさい。これに懲りず今後もよろしく願います。また、会報を作るにあたってご協力いただいた皆さんに感謝します。(み)

©1993 Bat Study and Conservation Group of Japan